

大動脈瘤を抱えて生きる患者のナラティブ

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
中川 恵

本研究は、大動脈瘤を患う患者へのインタビューを通して、患者が何を体験し、病いが生活の中でどのような意味をもつかを明らかにする事を目的とした。

胸部あるいは腹部大動脈瘤の診断を受け治療を経験した成人 2 名を研究協力者とし、インタビューを行い、それぞれのライフストーリーを再構成し質的に分析を行った。

その結果、患者が病いと共に生きるプロセスの中で、医師との信頼関係が患者と家族にとって生きる支えになる程重要である事、病院の緊急連絡先など重要情報が書かれた紙が実用的役割を果たすだけでなく、患者にとってお守りのような存在として心理的安定に寄与している事がわかった。また、これらの重要なテーマが保障された時、大動脈瘤を抱えた心理状態として、日常的には大きな不安を感じることなく生活できている事も示された。

さらに本研究の事例をナラティブ・メディスンの医療における物語特徴を参照枠として考察した所、特に「因果性／偶有性」の観点に重要性が認められた。例えば協力者から、命に関わる重大な病気に罹ったにも関わらず、他の病気で検査を受け偶然大動脈瘤が見つかった経緯が語られた。協力者はこれを幸運と解釈して元気を維持している。以上のような体験へのポジティブな因果的関連付けは、医療の質向上に患者側からの寄与が欠かせない事を示している。